

落ち葉堆肥農法 世界農業遺産へ第一歩 一次審査通過



江戸時代から落ち葉を堆肥にする伝統農法を世界農業遺産へ――。

三芳町・所沢市・ふじみ野市・川越市の3市1町が首都圏では初めての世界農業遺産と日本農業遺産の認定をめざし、8月24日に「武蔵野の落ち葉堆肥農法世界農業遺産推進協議会」を設立。9月30日には農林水産省へ申請書を提出し、11月24日の一次審査の結果、落ち葉堆肥農法が全国15県19地域から絞り込まれた9県10地域のなかに含まれ、1次審査を通過しました。世界農業遺産専門家会議委員による現地調査が行われ、今後は2～3月の最終審査を経て3月末までに国内の承認が決まります。

世界農業遺産 日本農業遺産

世界農業遺産は社会や環境に適切しながら何世代にもわたり形作られた伝統農法など、世界的に重要な農林水産業システムを認定するシステムです。日本農業遺産は2016年に創設されたもので、日本における重要性、並びに歴史的及び現代的な重要性を有するものを農林水産大臣が認定する仕組みです。

みよし野菜の美味しさの秘密に「落ち葉」あり

落ち葉の恵み。

三芳町のブランド「みよし野菜」の美味しさの秘密には
伝統農法を守り続ける住民の想いがありました。

今

も三芳町に残る平地林。江戸時代に畑作新田が開拓された以降に形成されたもので、地下水位が低く火山灰土で覆われ、栄養分や水が少ない荒野であったと言われています。

落ち葉堆肥農法

荒野に作物を作るため江戸時代、人工的に木を植え林を作り、地下水をくみ上げました。さらに枯れた落ち葉を堆肥にして畑の肥料として活用するこの農法を「落ち葉堆肥農法」と呼びます。首都圏内でのこの農法が今も残っているのは珍しく貴重であり、この農法を守り続けている三芳町・所沢市・ふじみ野市・川越市の3市1町で「武蔵野の落ち葉堆肥農法世界農業遺産推進協議会」を発足し、世界農業遺産・日本農業遺産登録に向けて歩みだしました。

ヤマの恵み

平地林や雑木林のことを三芳の農家の皆さんは「ヤマ」と呼びます。高低差がある「山(mountain)」という意味ではありません。語源的には「ヤマ」は「大きい」、「マ」は「恵み」とされています。

とされています。落ち葉堆肥農法は「ヤマ(平地林)」が大きな恵みと富を人々にもたらしてくれたのです。

伝統を守り続ける

私たちの生活に密接、共生している里山。しかし町の緑地は町の10%程度まで減り、新しく三芳町で暮らす住民が町や緑への関心が薄いことなども課題とされています。

堆肥となる落ち葉には緑が必要不可欠です。緑を保全することは、三芳町の伝統農法を守ることに繋がります。三芳町の貴重な緑は埼玉県内でも注目され、昨年6月23日には藤久保の平地林が埼玉県の緑のトラスト保全第14号地に決定しました。寄附を募り、埼玉県の優れた自然や貴重な歴史、文化を財産として保全する運動も行われています。

落ち葉の恵み

先人が生み出した落ち葉堆肥農法。東京から一番近い町にも関わらず、農業が盛んな三芳町。今月の特集では、先人が残した「落ち葉の恵み」に迫ります。